

「蜘蛛の網、鼠の穴」

登場人物

豊島 咲也 (22)

落研の学生

豊島 光大 (29)

咲也の兄

豊島 美咲 (54)

咲也の母。コンビニ店長

豊島 大 (52)

咲也の父。コンビニオーナー

野崎 秋穂 (22)

咲也の恋人

小笠原 莉奈 (24)

落研のOB

板東 涼子 (35)

弁護士

小平 (54)

IG製薬人事部長

林 (26)

調査会社・オンリースタッフのバイト

沼田 (34)

コンビニのエリアマネージャー

菅田 (26)

インフルエンサー

落研部長

落研部員 1

咲也の友人 1

咲也の友人 2

裁判官

民事調停委員 1

民事調停委員 2

IG製薬副社長

IG製薬内部監査室長

○コンビニ・売り場

客の林明宏（26）がレジで飲料と
パンの会計を済ませている。

林「パスモで」

会計をしている店員はオーナーの妻・
豊島美咲（54）。

美咲「かしこまりました」

オーナーの豊島大（52）はチルド
コーナーでパック飲料の補充を行って
いる。

店の電話が鳴る。

大はパック飲料の並びが消費期限順に
なっていないことに気づき、独り言。

大「なんでこういうことするかな」

パック飲料を消費期限順に並べ直す。
電話はまだ鳴っている。林は店を出て
行って、美咲は次の客の会計に入る。

美咲「電話！」

大「はいはい」

大、電話を取りに事務所に向かう。

○同・事務所

電話を取る大。

大「お電話ありがとうございます。シチズン

マート大平店です」

電話の相手は無言。

大「もしもし。もしもし」

相手は無言のまま。

大「もしもし。すみません電波が悪いよう

で聞こえないので一旦切りますね。失礼し

ます」

電話を切って売り場に出ようとする大。

するとまた電話が鳴る。

大は再び電話を取る。

大「お電話ありがとうございます。シチズン

マート大平店です」

男の声「シチズンマート大平店さんではどう

責任を取られるおつもりなんですか？」

大「はい？」

男の声「しらばっくれなだけでくださいよ。

本部に直接言ってもいいんですよ。私、

知り合いいるから、中に」

大「あのー、お客様ごめんなさい、どうされましたでしょうか？ 何かあの、うちの店員に至らないところでもございましたでしょうか？」

男の声「そういう反応をするってことは自分の息子が何をしたか分かってるってことでしょ？ もういいですよ、本部に直接言いますから」

電話が切れる。

弧につままれたような表情の大。

○同・売り場

レジに立っている美咲がふと外を見ると、そこに自撮り棒を持った半裸の男が立っていて、コンビニを背にスマホでライブ配信をしているのが見える。
怪訝な表情の美咲。

○チェーン居酒屋（夜）

豊島咲也（22）が小笠原莉奈（24）

と話している。同じ座敷席には学生男女が他に数人いて歓談中。彼らは黎明大学落語研究会のメンバー。

莉奈「でもニッソーなんて大手でしょ？

大手の内定取れただけいいじゃん。私なんか卒業してずっとバイトだもん」

咲也「ははは、それもそういう生き方じゃないっすか。わかりましたわかりましたって言いながら笑ってただけっすよ俺なんか」

莉奈「それ嫌味？　ただ周囲に流されてる

だけで大手の内定取れたってことでしょ」

咲也「いやいや、そういうんじゃない、そういうんじゃないっすよ。ちよつと何言うんすか、ははは」

店員がスイートポテトを持ってくる。

店員「お待たせしました、スイートポテトです」

莉奈「あれ、頼んだ？」

咲也「あ、フライドポテト頼んだんですけど」

店員「少々お待ちください」

困った表情で厨房の方を見る店員。

咲也「あ、いいですいいです、それください」

店員「よろしいですか？」

咲也「見たら甘いのが食べたくなくなっちゃった、

ははは」

店員「すみません」

スイーツポテトを置いて去る店員。

莉奈「甘いなあ君は」

咲也「ははは、そっすかね」

落研部長「じゃあ改めまして、黎明大学落

語研究会第33期ラスト寄席の成功を祈願

して、乾杯！」

咲也、ニヤニヤして、

咲也「あ、かんばしい」

○豊島家・外観（朝）

玄関に入っていく咲也。

○同・居間（朝）

咲也が居間に入ってくる。

咲也「ただいまー」

テーブルに真面目な表情をした美咲と

大が座っているのを見て少し驚く。

咲也「わ、どうしたの。誰か死んだ？

兄貴？」

美咲「ねえあんた、なんかした？」

冷蔵庫を開けて牛乳を取る咲也。

咲也「なに、なんかって。何もしてないと

思うけど」

大「店に変な電話がかかってくるんだよ」

美咲「ユーチューバーも来てた」

咲也「はは、バズってんじゃないの。ツイッ

ターとかやってないから知らないけど」

牛乳を飲む咲也。

大「その一人が言うにはな、お前が人殺した
って言うんだよ」

牛乳を吹き出す咲也。

* * *

ユーチューブの画面を覗き込む三人。

そこには「【胸糞注意】大平一高卒業生・豊島咲也（22）による残虐なイジメがこれです」と題された、スマホ撮影のイジメ動画が映っている。

内容は校舎裏で数人の男子生徒たちが一人の男子生徒に犬の糞を無理矢理食べさせようとして、男子生徒が泣き叫んでいるというもの。

イジメっ子の顔は焦点が合っておらず、スマホもブレているためはつきりとは分からないが、その一人は咲也のようにも見える。

大「お前の名前でエゴサしたらこれが出てきたんだよ」

咲也「エゴサじゃないだろ俺の名前で親父が検索したら」

美咲「うー見てられない」

大、動画の説明文を読み上げる。

大「被害者の方は、このあとイジメを苦にして自殺を遂げられたそうです、だって。な

んでこんなことやったの？」

咲也「いややってないわ！ どう見ても俺じゃないだろ！ こんな髪型にしたことないし！」

大「言われてみればそうかなあ」

咲也「言われなくてもそうだよ！ とにかく誰かの嫌がらせだからこれは。相手にしないで。ほっときゃ消えるよそのうち」

席を立てて二階の自室に向かう咲也。

美咲「じゃこのイジメっ子、咲也じゃないのね？」

咲也「違うよ。アホくさい。寝るわ」

○同・二階廊下（朝）

咲也が階段を上がってくると、兄の

豊島光大（29）の部屋からゲームの音声と思しき美少女キャラの萌え声が漏れ聞こえてくる。

咲也「ねえ兄貴、ゲームやるのはいいんだけどちよっと音下げてくださいない？」

咲也、光大の部屋の扉を見るが、音は下がる気配がない。

諦めて自室に入ろうとする咲也。

と、光大が扉を開けて顔を出す。

光大「セックスしてきたの」

咲也「は！？」

光大「ブサイクの私と違ってイケメンはやりたい放題でいいでゲスねえ」

光大、不気味な笑みを浮かべて部屋の中に戻る。

咲也「なんなの？」

○コンビニ・売り場

何人か行列のできているレジを一人でさばいている美咲。

○同・事務所

電話をしている大。

大「すみません。はい、はい。すみません。ごもつともです。すみません、あ、ちよっ

とすいませんもうあの、失礼しますね」

電話を切る大。すぐに電話が鳴る。

大「お電話ありがとうございます。すぐに電話が鳴る。

マート大平店でござい……あ、すいません

その件ですけれどもウチの子ではないみたいです。すいません勘違いだそうです」

コンビニのエリアマネージャーの沼田

(34)が事務所に入ってくる。

沼田は大に会釈して椅子に座ると、

スマホをいじりだす。

大「あ、あのー、そういうことですのでご了承

承ください失礼します」

大、電話を切る。すぐさま次の電話が

来るが、大は電話を留守電にする。

大「お疲れ様です」

沼田「レジ、並んでますけど大丈夫ですか？」

大「あああの、二時からバイトの子一人来てくれるみたいなんで。大丈夫です」

沼田「大変ですねえ」

大「いやもう、おかげさまで」

沼田「おかげさまではないでしょ」

○黎明大学・落研部室

落研部長と部員1が咲也と話している。

咲也「え？」

部員1「頼む！ 豊島が悪くないのはわかっているが、ラスト寄席は欠席してくれ！」

部長「おめえさんがな、十八番の演目鼠穴

をこの四年間、磨きに磨き上げてきたのは
よおく知ってる。ああ、言うな言うな。

あの動画に映ってるのおめえさんじゃねえ
ってこともよおくわかってるよ。だがな、

俺も部長だ。このラスト寄席、必ず成功さ
せる義務があるじゃねえか」

咲也「いや、そんな……」

部員1「炎上にはね、巻き込まれるわけにや
あいかねえのよ！ こればっかりは！

な！ そうだろ、はつつあん！」

部長「誰がはつつあんだ」

部員1「いやノらないんかい！」

○コンビニ・事務所

大と沼田が話している。

沼田「え、どういふことなんですか？ 自分もネットで例の動画見ましたけど――」

大「あ、それがですね、別人」

沼田「別人。あらー。間違われちゃったんですか」

大「みたいですすね、はい。本人に聞きまして、え」

沼田「それ、本当なんですか」

大「いや、私もね、考えてみたんだけども、下の子の高校ではイジメとか自殺とか、そんな話は聞かなかったですね。上の子は自分がイジメられる側だったけれども」

沼田「へえ」

○黎明大学・教室

頬杖をついて授業を聞いている咲也。

スマホがバイブして、見ると友人「広

瀬」からLINEが来ている。「なんか
ツイッターで炎上してるけど大丈夫？」
と、スマホカメラのシャッター音。
咲也、音のした方を見ると、講義を
受けていた女子学生がスマホをしま
うところ。

怪訝な眼差しで彼女を見る咲也。

講師「それじゃあ、今日はここまで」

ノート類の片付けを始める生徒たち。

講師「あ、豊島さん。来てたら学務課寄るよ
う伝えてくれて言われてるから、悪いん
だけど行ってもらえる？」

咲也「あ、はい」

○コンビニ・事務室

大と沼田が話している。

沼田「どうしよう、言いにくいなあ」

大「なんですか」

沼田「自分としては豊島さんの言い分は
信じたいと思うんです。ただ上の方はで

すね、その、炎上みたいなのがあるよ

シチズンマート全体の問題になってしま
うので損害賠償請求を検討してるみたいで

大「はあ。え？ あ誰にですか？」

沼田「そりゃ、豊島さんに対してでしょ」

○黎明大学・学務課相談室

並んで座る学部長と学長と話している

咲也。

咲也「いやいやいや、だから俺じゃないんで
すって！なんでそうなるのかわかり

ませんが俺は関係ないですよ！」

学部長「それならいい、それならいい、それ

ならいいけど、ただクレーム電話が本当に

鳴り止まない。いま学務課仕事にならない

状態なんだよ」

学長「とにかくどうにかしてもらわないと」

○株式会社オンリースタッフ・オフィス（夜）

林が給茶機の前でコーヒーが注がれる

のを眺めている。

○ファミレス（夜）

咲也と野崎秋穂（22）が食事を

している。秋穂の表情は冴えない。

咲也「参ったわぁ、急にさぁ。炎上ってこん

ななんだって思ったなぁ」

秋穂「そうだね」

咲也「え、なに、どうしたの。そんなに心配

してくれてるの。ははは」

秋穂「それってさ、私信じていいのかな？」

咲也「それって？ どれ？」

秋穂「本当はさっきのイジメ動画に映ってる

の咲也なんじゃない？」

傷ついたように笑う咲也。

咲也「え、ちよつと待って、そう見える？」

俺たちもう結構、長いじゃん？ その中で

さ、俺が暴力を振るったとか、誰かイジメ

てたとか、あった？」

秋穂「ないよ。ないけどさ」

咲也「じゃ信じてよお」

秋穂、スマホを取り出して、操作すると、その画面を咲也に見せる。

それはツイッターの画像ツイートで、咲也が莉奈の肩を抱いてラブホテルに入っていく画像。

秋穂「こういうの見たらさ、信じていいかわからなくなるよね？」

咲也「なにそれ」

秋穂「ネットにあったよ」

咲也「なんでそんなの。誰が」

秋穂「そんなに見られたらまずいもの？」

咲也「いや、違うよこれはさ、こないだ落研のみんなと飲んでて、終電終わっちゃったから、この人OBなんだけど泥酔してたし、他に横になって休めそうなところもなくて」

秋穂「そういうときってタクシー呼ばない？」

咲也「そんなお金ないよ。だいたい家の場所言えないぐらい酔ってたから、とりあえず

と、思っ、て……ていうか、それ、そこ映ってないけど落研のみんないるんだよ？

聞いてみてよ。そうすれば本当のことだってわかるから」

秋穂「口裏合わせしてなければ」

咲也「そんなこと言い出したらキリないじゃん」

秋穂「だね。だからさ、しばらく距離置いた方がいいと思う」

咲也「それ、どういう意味？」

秋穂「そのまま。ちょうどいいじゃん、卒業も近いし、お互いに今のままの関係でいいのか見つめ直す良い機会だと思う」

無言で秋穂を見つめる咲也。

と、咲也のスマホがバイブする。

生氣無くその画面を見ると、「ニッソー採用担当 小島」からメールが来ていて、その件名は「内定取り消しのご連絡」。

○豊島家・居間（夜）

咲也、大、美咲の三人がテーブルに座って、どよーんとしている。

玄関チャイムが鳴るが、誰も動かない。

美咲「（大に）出てよ」

大「またイタズラだよ」

美咲「なんで住所まで」

大「咲也、お前悪くないからな」

咲也「そんなこと言われたら逆に責任を感じる

んですけど」

大「なんで責任を感じる。やってないんだろ。

やってないんだよな？ やったのか？ や

ったのか！」

咲也「や、やってないって本当だよ！」

美咲「いい加減にして！」

二階から光大が降りてきて居間に入ってくる。

光大「なんだか大変ですねぇ。私のように

いつまでも親のすねをかじって引きこもっ

ておりますとわかりませんが、外の世界は

随分と物騒なようで」

光大を見つめる三人。

光大は不気味な笑みを浮かべて、食事の載ったトレイを手に二階に戻る。

大「お前も少しは苦労しろ！」

○板東法律相談所・外観

「炎上・嫌がらせを最速解決！」の安っぽい看板が出ている。

○同・中

弁護士の板東涼子（35）がノートパソコンでツイッターやユーチューブを見ている。彼女の前には咲也と美咲と大が神妙な面持ちで座っている。

涼子「ヒドいですねえ」

大「そうなんですよ。本当にもう」

美咲「家にまで嫌がらせに来る人もいるぐらいです」

無表情の涼子。

涼子「咲也さんでしたっけ？ あなた本当にやっけてないんですか？」

大「ちよ、先生！ やっけてないって言ってるじゃないですか！」

美咲「そうですよ！」

涼子「咲也さんに聞いてるんですけど」

言ってやれ、という仕草をする大。

咲也「や、やっけてないです……よ？」

大「なんだよそれ！」

美咲「ちよつとあんたなんで動揺してるの

よ！ ちゃんと言いなさいよ！」

涼子「そうですよー。はっきり言わないと。

何が事実で何が事実じゃないのか。何が望

みで何は許容できないのか。これから何ヶ

月もの間、何十回も聞かれますからね」

美咲「先生それじゃあこの子が加害者みたい

じゃないですか」

涼子「ええ」

大「はあ！？」

美咲「もういいです。ありがとうございます

た」

苛立たしげに席を立って外に出ていこうとする美咲。後に続く大。困惑の表情を浮かべている咲也。

涼子「ここで背を向けたらみんなそう思いますよ。逃げたんだから黒だろう。黒なら自分が罰を与えても構わないだろう」

立ち止まる美咲と大。

涼子、咲也を見つめて、

涼子「理不尽だよね。自分は何も悪くないのに一方的に悪者扱いされて、負った傷は自分で直さないといけない。その治療費は自分持ち。名誉毀損の裁判で弁護士費用を全額まかなえるなんてことめったにないからね。でもそうしないと終わらない。そうしたって完全には終わらない。それでも何もしないよりはマシ。こっちも商売だから、私はあなたが純粋な炎上の被害者でも、そうじゃなくても代理人は引き受けます。でももう一度聞きます。あなたは本当に

イジメには関与していないんですか？

答える前に、いい、忘れないで。これから
は親御さんや誰かじゃなくてあなた本人が
戦う必要がある。自分で自分を信じられな
かったら戦えない。どう？ この動画の
イジメ加害者はあなた？」

咲也「俺じゃありません」

涼子「そう。じゃあ、これからのことを考え
ましょう」

○コンビニ・事務所

大がクレーム電話を受けている。

電話機には録音機が付けられ、録音中
を知らせるランプが点灯している。

涼子の声「まず必要なのは被害の仕分け。

残念だけど、ネット炎上ではその全てに法
的に対処することはできません。だから被
害をまずは刑事と民事に分ける。中には微
妙なものもあるだろうけど、たとえば迷惑
電話みたいな、店に対する執拗かつ具体的

な嫌がらせがあれば業務妨害で警察に被害届を出した方がいい。民事はネットの投稿なんかね。これは影響力の大きいもの、言い換えれば被害の度合いが大きいものだけ名誉毀損で訴訟を検討する。わかってもらいたいのは、これは必ずしも炎上を始めた人とは一致しないということ」

○同・売り場

美咲がレジ打ちをしていると、入り口からユーチューバーらしき男が、スマホで動画撮影しながら入ってくる。

ユーチューバー「こんにちはー！ 豊島咲也くんはいらっしゃいますかー！」

怯えた目でユーチューバーを見る客たち。美咲は黙ってスマホを取り出し、ユーチューバーを動画撮影し始める。

ユーチューバー「こんにちは！ 咲也くんいらっしゃいますか！ お母さんですよね！ すいません無視しないでもらえま

す？」

咲也の声「一致しない……」

涼子の声「そう、一致しない。初めは誰も気にしなかったかもしれない話題が、インフルエンサーを伝ってある日突然インターネット全体の話題になってしまふ。炎上ってそういうものなんです。だから誰が始めたかは重要じゃない。それに現実問題として、広大なネットの海で最初の一人を見つけるには多大な労力がある。とても裁判と同時に並行ではできません」

美咲の声「じゃあ、警察にも言わない、裁判もしない、そういうその他の人はほっとけって言うんですか？」

涼子の声「ま、飽きるのを待つ方が裁判沙汰にするより早いでしょうね。でもできることがないわけでもない。人ってね、見るからそれに関心を持つんです。見えないものは気にしない。だから面倒でも運営元是一件一件削除要請を出してみる。そのすべ

てが通るわけでもないにしても、目にする機会が減れば野次馬も減る」

○ファミレス・座席くドリンクバー（夜）

咲也がノートパソコンでツイッターや掲示板の名誉毀損投稿を、横に広げたノートに逐一メモを取りながらスクリーンショットで保存している。

ノートにはびっしりと文字が書き込まれ、そこには様々な名誉毀損投稿がその重要度を示す○△×のマークと共に書かれ、また図表には様々な

投稿の系統樹・関係図が書かれている。

涼子の声「とにかく刑事、民事、それから

削除要請のいずれの場合でも被害の証明が必要だ。電話は録音、物質的な被害は録画、インターネット上の投稿はURLとパソコンのスクリーンショットを取っておく。証拠は多いに越したことはありません。大変でしょうけど、ここで苦勞をしておけ

ば後々が楽になるし、裁判になった時に
有利ですから、苦勞して下さい」

大の声「先生言い方ってものがさ」

涼子の声「嘘のうまい弁護士と嘘のつけない
弁護士ならどっちの方が信用できます？」

背もたれに大きくもたれ、呻きながら
目をゴシゴシとこする咲也。

窓の外を見ると夜になっている。

空のコップを手に、咲也はドリンクバ
ーに向かう。

ドリンクバーには先客がいて、振り返
ると、それは莉奈。

莉奈「あ」

咲也「あ」

* * *

咲也のノートパソコンを覗き込んでい
る莉奈。

莉奈「うわーえっぐ。なんかいつの間にか
大変なことになってたんだねー」

咲也「そっすよ。どこの誰のせいかわらない

けど……」

莉奈、座り直す。

しばらく沈黙が流れる。

咲也「あの」

莉奈「ん？」

咲也「サクサクしっとりきなこって知ってます？」

莉奈「あああれ好き。おいしいよね」

咲也「そうなんすよ。サクサクだし、しっとりしてるし、きなこで……」

莉奈「どうした。君そのしゃべりで本当に落研か？」

咲也、意を決して頭を下げて、

咲也「すいませんやっぱりこの間のあれ無かったことにしてください！」

莉奈「ほう」

咲也「やっぱり、先輩はああ言ってくれましたけど、ハッキリ断るべきでした」

莉奈「先に誘った私が悪いと」

咲也「いや、そういうことじゃないですけ

ど！」

莉奈「ま酔ってたからねこっちも。お互い酔ってたんだよ。そうでしょ？」

咲也「そ、そうです！」

莉奈「そっかあ、あの夜のことは酒が見せた幻だったんだなあ」

咲也「ですね、芝浜みたい。ははは」

咲也を真顔で見つめる莉奈。

咲也「ははは……」

○牛井チェーン店

林がスマホを見ながら牛井を食べている。

○東京簡易裁判所前

スーツ姿の咲也が建物を見上げている。
その隣には涼子が立ってスマホをいじっている。

涼子「今日は民事調停だから、まあ身構えな
くたっいいい。和解が成立すればそれで

この件はひとまず終了。訴訟も裁判もナシ。メリットは当然面倒がなくなること。でも判断は慎重に。自分には正直になること。合意内容には法的な効力があるからね」

咲也「うっす」

○同・小会議室

咲也と涼子、インフルエンサーの菅田（26）と弁護士、一人の裁判官と二人の調停委員がテーブルを囲んでいる。

裁判官「もう一度、事実の確認をしましょう。菅田さんは豊島さんの実名を付けて、えーと、例のイジメ動画を自分のチャンネルでユーチューブに投稿した、これは間違いありませんよね？」

菅田「は、間違いないです」

調停委員1「これどこで拾ってきたの？」

菅田「これは、元々ユーチューブに上がってたやつです」

調停委員 1 「前からあったやつなんだ」

菅田 「そうですね。二三年ぐらい前からかな。

結構有名な」

裁判官 「で、豊島さんは、このイジメ動画に

映ってる人ではないんですよね？」

咲也 「違います」

裁判官 「知ってる人ですか？」

咲也 「私ではないですし、全員知らない人です」

裁判官 「だからそこに行き違いがあるんだよな」

裁判官、笑う。

調停委員 2 「菅田さんはどこでこの動画に

映ってるのが豊島さんだって知ったんですか」

涼子 「豊島さんは映ってないですよ」

調停委員 2 「あ、すいません。そういう風に言われてるっていうのは、どこで？」

菅田 「どこで……ツイッターとかで結構、流れてて」

調停委員 1 「みんなが言っていたらさ、ああ

そうなのかなって思っちゃうことあるよな」

菅田 「そうですね。本当に、ちよつと、ただ、

注意が足りなかったなって思います」

裁判官 「（咲也に）どうですか。いままで

話し合ってた中で、これあくまでも私の

印象ですけれども、歩み寄りの余地はある

んじゃないかって気がするんだけれど」

咲也、菅田を見つめる。菅田は目を

そらす。

沈黙。

調停委員 2 「菅田さんの方で動画を削除して、

その動画は間違っていたと、謝罪動画を

出すっていうのはどうですか？」

菅田 「はいあの、是非ともそうさせて下さい。

本当に、すみませんでした」

裁判官に向かって頭を下げる菅田。

二人の調停委員と裁判官は咲也を見る。

やや沈黙があつて、それから、

咲也 「ごめんなさい。それでは納得できませ

ん」

微かに微笑む涼子。

菅田、頭を上げて、咲也を見る。

菅田「はあ？」

裁判官「豊島さんの方で、これは最低限して欲しいっていうラインにどのへんになりますか」

菅田「謝ってんじゃん。ねえ。ねえ」

菅田の弁護士「菅田さん、ちよつと落ち着き

ましよう」

裁判官「一旦休憩挟みましようか」

菅田「謝ってんじゃん。おかしいだろお前」

○同・外

涼子と咲也が出てくる。

涼子、嬉しそうに笑いながら、

涼子「あー、合意しなくて正解だわ。ああい
うヤツは痛い目見ないと分からないんだよ
なあ。勝てるよ裁判、楽勝」

咲也「嬉しそうっすねえ」

涼子「そりやそうだよ。調停で終わっちゃつたらそれ以上弁護士費用取れないし、裁判報酬もないんだから」

咲也、呆れた顔で涼子を見る。

涼子「これが大人ってやつ。社会へようこそ」

○豊島家・咲也の部屋（夜）

ベッドに寝転がってスマホでLINEを見ている咲也。秋穂に「誹謗中傷の相手、訴えることになった。弁護士先生は楽勝で勝てるって」のメッセージを少し前に送っているが、いつまで経っても既読マークは付かない。

咲也、ため息をつけてスマホを置き、部屋を出る。

○同・廊下（夜）

咲也が階段を降りかけると、突然光大が部屋から顔を出す。

光大「俺を無能な引きこもりニートだと思っ

てるだろ！」

咲也「な、なに急に」

光大「この一ヶ月間、俺が何をしていたと

思う？」

咲也「いや知らないけど……」

光大、タブレット端末を片手に咲也につかつかと歩み寄る。

咲也「うわうわ、なにになにに、怖い怖い」

タブレットの画面を指さす光大。そこにはユーチューブ動画のコメント欄のZachというユーザーの半年前のコメントが表示されている。「イジメ加害者の一人、黎明大学の豊島咲也って人」

光大「ありとあらゆる掲示板、まとめサイト、SNSを調べた。このコメントが例のイジメ動画とお前を結びつける最初のものだ。

間違いない」

咲也「え、いやでも……」

光大「お兄ちゃんを信じるでヤンス！」

咲也にタブレットを無理矢理渡して

自室に戻る光大。

タブレットの画面を見つめる咲也。

○満員電車内

林が満員電車に揺られている。

○コンビニ・売り場

美咲がレジ打ちをしている。

大はチルドコーナーでパック飲料の補充を行っている。

大、パック飲料の並びが消費期限順になっていないことに気づき、独り言。

大「しょうがないなあ」

大はそれを消費期限順に並べ直す。

○市民ホール・小ホール・外

「黎明大学落語研究会第三十三期ラスト寄席」の看板が出ている。

○同・中

後方扉から咲也が入ってくる。

場内は暗く、舞台上で部長の口演中。

部長は咲也の方を見て、彼に気付く。

一瞬、動きが止まる。それから、

部長「すまねえ。おらあ、自分のことばかり
考えて、おめえのことなんかなあんも考え
ちやいなかった。許してくれとは言わねえ。
けれどもどうか分かって欲しい。この俺が
自分のしたことを悔いてるってことを。
頼む。今生のお願いだ。頼む」

咲也、困ったような微笑みを浮かべる。

部長も咲也を見て泣き笑いのような
表情を浮かべる。

○飲み屋（夜）

咲也が友人二人と飲んでいる。

友人1「ああじゃあ、裁判とかこれからなん
だ」

咲也「なんだかんだ一年ぐらいかかるんだっ
つて。いやなんかそれ考えたらさ、最初は

弁護士費用高いなあとか思ったけど、そんなもんかあって思ったな」

友人1「までも良かったね、目処が付いて。

終わりがわかんないの一番キツイもんな」

咲也「そうそう」

友人2「咲也そういえばさあ、最近、秋穂と会ってないの？」

咲也「ああ、そういえば二三ヶ月会ってないかなあ」

友人1「え別れたの？」

咲也「いやなんか、別れたっていうか、一旦距離置こうとか言われてそのまま」

友人1「なにそれえ」

友人2「ちゃんと話すれば。秋穂、たぶん会いたがってるよ」

咲也「ああ」

友人1「なんだよその反応お前」

咲也「いやなんかさ、頻繁に会ってた時はそれが当たり前だからなんとも思わなかったんだけど、会わなくなったらすっちは

当たり前になっちゃって、どっからか寂しいとか思わなくなってきた。なんか、炎上みたいだな。ほら炎上もさ、燃えてるときはみんなガーってその話ばっかするけど、燃えなくなったら一気にその話しなくなるじゃん？」

友人2 「経験者は語る？」

咲也 「ははは、炎上には詳しいから俺」

友人1 「お前炎上と恋愛一緒にすんなよ」

咲也のスマホから着信音。

咲也 「あ、ちよつとごめん」

咲也、席を立つ。

○同・外（夜）

電話に出ながら咲也が出てくる。

咲也 「はいもしもし」

涼子の声 「あ、遅くにごめんね」

咲也 「いえいえ、なんか進展ありましたか？」

涼子の声 「うん。この間の発信者情報開示

請求だけど、今日プロバイダから返事が

届いて、後で転送するけどとりあえず連絡
だけと思って」

咲也「なんていう人ですか？」

涼子の声「うーんとね、ちよっと待って……
社内からだね」

咲也「社内？」

涼子の声「うん、会社の中。株式会社IG
製菓っていうところ。知ってる？」

咲也「いや、名前は知ってますけど。就活で
面接行きましたし」

涼子の声「一応会社の方はその小平ってい
う人が書き込んだってプロバイダに回答
してるらしい」

咲也「小平……あ」

○（回想）IG製菓本社・会議室

咲也の新卒採用面接の最中。会社側の
面接官は小平と他二人で、咲也は小平
が首から提げた社員証を見つめている。
小平、エントリーシートを見ながら、

小平「お、豊島さん落研なんですか」

咲也「そうですね、ははは、ちよっと恥ずかしいですけど」

小平「いやいや、ボクも落研出身」

咲也「あ、そうなんですか！　なんか失礼しました」

小平「え、十八番の演目とかありますか？」

咲也「はいあの、鼠穴です」

小平、笑う。

小平「渋いなあ。いやあボクも談志さんの鼠穴は好きでよく聞いてたけど、え、どういふところに惹かれたんです？」

咲也「あれって、遊びほうけて無一文になった男が商売で成功して、また全てを失う悪夢を見るって噺じゃないですか。夢オチだからハッピーエンドのはずなのにモヤモヤしたものが残って、それがなんか好きなんですよね。なんだろう、一度地獄を見た人はその後の人生でどんなに幸せになっても、ずっとこの幸せは嘘なんじゃないかっ

て心の片隅で疑い続けるみたいなの、そういう怖さが気持ち悪くていいなって」

小平「なんか意外ですね。明るい感じなのに。演ってるところ想像できない」

咲也「あ、よかったら来て下さい。学期末の

サークル落語会で自分、鼠穴演りますので」

小平「ええ、ええ、是非とも来て下さい」

にっこりと笑う咲也。

○ I G 製薬本社・会議室

小平と内部監査室長、法務部長、副社

長の四人が並んで咲也和涼子に頭を下

げている。小平の表情はとても辛そう。

副社長「このたびは本当に申し訳ございませんでした」

咲也「ああいえ、す、座って下さい」

副社長「はい、失礼します」

四人、座る。

副社長「本当にですね、あのー、このようなことは、あってはならないことだと思いま

す。本当に、私たちの軽率な行為で、豊島様に多大なご迷惑をおかけ致したことを、改めてお詫びしたいと思います。本当に申し訳ございませんでした」

再び頭を下げる四人。

涼子「あ、そういうの結構なので、社内調査でわかっていることだけ教えて下さい」

副社長「はい！ あ、じゃあ、島崎さん」

監査室長「はい、私内部監査室の島崎と

申します。よろしく願います。えー、ではですね、お手元の書類にもございますが、私の方から、弊社人事部小平の行ったことについてご説明させていただきます」

○（回想） I G 製薬本社・オフィス

レターパックを手にした総務部社員が
小平の席までやってくる。

総務部社員「小平部長、荷物届いてました」
小平「ありがとう」

レターパックの送り主は「（株）オン

リースタッフ」。

小平、受け取ったレターパックをハサミで開封する。中からはクリップで別の紙とまとめられた就活のエントリーシートのコピーが出てくる。

小平、その一枚一枚を精査していく。

○（回想）同（夜）

パソコンに文章を打ち込んでいる小平。人事部社員「お先に失礼します」

小平「お疲れ様」

終業時刻は過ぎており、オフィスに残っている人はもう少ない。

小平、ため息をついて目薬をさす。

それからパソコンの別タブを開いて、ツイッターを見る。

するとタイムラインにツイートのスクリーンショット付きのツイートが流れてくる。その文面は「こいつイジメ自慢して叩かれ始めたら鍵掛けて逃走

してるんだけど、無駄だから」

スクリーンショットにはユナイテッドステイツオブパイオツというアカウン
トがユーチューブのイジメ動画のリン
クを貼って「懐かしいなあ、こんな
ヤンチャした頃もあつたっけ藁」の
一言を付けたツイートが写っている。

小平「ユナイテッドステイツオブパイオツ」

小平、独り言を言って、先程の書類の
中から何かを探す。

出てきたのは咲也のエントリーシート。
それをめくると、SNS活動調査報告
書と題されたプリントが現れる。その
ツイッターの欄にユナイテッドステイ
ツオブパイオツと書かれている。
それとツイッター画面を交互に見比べ
る小平。

○ I G 製薬本社・会議室

小平が泣きながら話している。

小平「それで、私の方はもうてつきり豊島さんのツイッターアカウントがユナイテッドステイツオブパイオツだと思ったものですから、正義の暴走と言うんでしょうか、そのイジメ動画をそれからユーチューブで見まして、こんな悪いことをした人間が法に裁かれることもなくのうのうと社会に出ようとしていると、もうそう考えたらゾーッとしまして、それで、思わず豊島さんの本名を、ユーチューブのコメント欄に書き込んでしまったと……本当に、本当に申し訳ございません！」

頭を下げる小平。他の三人の社員も頭を下げる。

涼子「すいませんお話を伺いますと、最初にそのツイッターアカウントを豊島さんのものだと指摘したのは小平さんとは別の方なわけですよ？ 豊島さんツイッターアカウント持ってます？」

咲也「ツイッターもフェイスブックもやって

ないです」

涼子「その報告書を作成されたのはどなた
なんですか？」

監査室長を見る副社長。

監査室長「こちらにはおりません」

涼子「ん、どなたなんですか？」

監査室長「外部委託しているものになります
ので、ちよつと具体的な担当者までは私ど
もも把握しておりません」

咲也、前のめりで、

咲也「なんていう会社ですか？」

○オンラインスタッフ・オフィス

黙々とパソコンに文字を打ち込んでい
る林の後ろに、女性上司がやってくる。

上司「林さん、ちよつといい？」

林「あはい、なんですか？」

○同・小会議室

咲也と涼子が座って待っている。

咲也は落ち着きなくテーブルの上で

指を遊ばせている。

涼子「何も言わないよ。自分で聞きたいこと

聞いて」

程なくして上司と林が入ってくる。

上司「すいませんお待たせ致しました。」

業務部アルバイトの林です」

林「どうも、本日はお忙しい中」

会釈する涼子と咲也。椅子に座る林と

上司。

咲也「あの、お話は」

林「あ、はい、あの、事情は伺っております」

咲也「ええと、じゃあ、あなたが、例のツイ

ッターアカウントを私のものとIG製菓

の小平さんに報告した？」

林「はい。その節は大変ご迷惑をおかけ致し

ました」

沈黙。

咲也、緊張で少し笑ってしまふ。

咲也「え、なんでそんなことをしたんです

か？」

林「はい。企業様からお預かり致しました調査案件につきまして、当該人物がどのようなSNS活動を行っているかを調査するのが私の業務になりますので」

咲也「あー……」

沈黙。

咲也「間違っていたわけですよ？ 私のアカウントじゃないものを私のアカウントとして報告したと思うんですけど」

林「そうなるかと思います」

上司「どうして間違ったか話してあげて」

林「あ、えーと、当該ツイッターアカウントに画像ツイートがありまして、それを画像検索にかけたところフェイスブックの投稿に同画像があることがわかりました」

○（回想）オンラインスタッフ・オフィス

パソコン画面を見ている林。そこにはブラウザで開かれたツイッターの「ユ

ナイテッドステイツオブパイオツ」

アカウントのホーム画面が映っている。

中には一枚の画像ツイートがあり、

その画像は咲也が落研のメンバーと

飲み会で盛り上がっているというもの。

画像に付けられたユナイテッドステイ

ツオブパイオツのコメントは「みんな

と飲み会。お前ら最高ダゼ☆」

林「それで、そのフェイスブックアカウント

のプロフィールを見たら黎明大学落語研究

会とあったので、黎明大学落語研究会で

検索をかけまして、メンバーの名前がわか

りました」

林はその画像を画像検索にかけ、ヒット

とした黎明大学落研部長のフェイスブ

ックの、黎明大学落語研究会部長と

書かれたプロフィールに目をやる。

○オンラインスタッフ・小会議室

硬い表情を浮かべて林の話聞く咲也。

林「それで一人一人SNSアカウントの特定
を行いました、最後にアカウント不明の
人物として、えーと」

咲也「豊島です」

林「あ、失礼しました。豊島さんが残りま
したので、その後豊島さんを当該アカウン
ト、ユナイテッドステイツオブパイオツの
本人と仮定してですね、更なる同定調査を
進めて、まあ間違いないだろうという判断
に至ったという次第です。その確認不足
ですね」

うんうんと頷く上司。

沈黙。

咲也「あの、ええとですね、悪いことをした
っていう自覚はないですかね？」

林「まあ、自分が誤解してしまったことで、
ご迷惑をおかけしたとは思いますが、
その点では申し訳ないです」

呆れてて少し笑う咲也。

咲也「いや、なんていうか、思ったより多分

迷惑かかっているんですけど」

上司「私どもの方でもですね、調査結果につきましても入社希望者の選考に際しての参考資料の一つとしてのみ使用することをパートナー企業様にお約束頂いておりますので、今回の情報漏洩につきましては弊社としてもパートナー企業様に対して法的な対応を検討しているところでございます」

咲也「そ、そういうことじゃなくてですね」
林「あの、自分にか罪に問われますかね？」

咲也、何か言おうとして、何も言えない。
い。

○オフィスビル・エレベーター内

咲也と涼子が乗っている。

咲也、ツイッターで「ユナイテッドステイツオブパイオツ」のユーザーを検索するが、アカウントはヒットしない。
い。

涼子「そのツイッターアカウントの開示請求は難しいだろうね。開示に足る正当な理由がない。でも削除されてるんならそれでいいんじゃない？ 思わぬ騒ぎに巻き込まれて向こうもビビったのかもね」

咲也、スマホしまつて、

咲也「さっきの人はどうなるんです？ 人も会社でもいいですけど」

涼子「IG製菓を相手取るなら力になれる。ま向こうも金積んで和解持ちかけてくるでしょ。でもこっちは難しい。なんたつて単なる間違いだから」

咲也「それが人を破滅させるような間違いでも？」

涼子「そうだよ」

エレベーターの扉が開いて、二人は降りる。

涼子「そんなものさ、社会なんて」

○ファミレス（夜）

咲也と秋穂が同じ席に座って食事をしている。二人の間には気まずい沈黙が流れている。

咲也「最近どっか行った？」

秋穂「行く暇ないよ卒論で」

咲也「卒論テーマ何にした？」

秋穂「言ったじゃん前に」

咲也「そうだっけ？ ごめん完全忘れてた」

秋穂「しょうがないよ。それどころじゃなかっただろうし」

咲也「そうだこれ、言えるうちに行つところ
と思うんだけど、ごめんなさい。落研の

OBと1回だけ浮気しました」

秋穂「ふうん」

咲也「なんか言つてよ、もうちよつと」

秋穂「知ってた」

咲也「だよね。まあそうだよね」

秋穂「あのさ」

咲也「え」

秋穂「今日なんで呼んだの」

咲也「あー。いやなんか、なんか話した方が
いいのかなって」

秋穂「なんかって何」

咲也「ええ……あ、そうそう、俺今度のこと
で学んだわ。話ってね、ちゃんとした方が
いい。なんか、ずっとボタンの掛け違い
掛け違いで炎上になったっぽいから。

聞く？ その話」

秋穂「どっちでもいい」

咲也「え、じゃ話すよ。いいの？」

秋穂「いや別にいいよ。好きに話しなよ。

いやでも面白く話してよ？」

咲也「なにそのハードル」

秋穂「だって自分落研じゃん」

咲也、笑う。

咲也「いや落研だけどさ。え、なにそれ」

秋穂も表情に笑みを浮かべる。

秋穂「落研の意地でしようよ」

咲也「落語って別に笑える噺ばっかじゃない
からね？ 俺だって鼠穴だよ、十八番」

秋穂「知らないよなんだよそれ」

咲也「鼠穴って言うのはさあ」

少し空気和んで、二人の話は続く。

○豊島家・玄関く二階廊下（夜）

両親は寝静まって室内は暗い。

そこに咲也が帰ってくる。

咲也「（小声で）ただいまあ」

咲也、音を立てないよう忍び足で二階に上がる。

二階廊下に達して自分の部屋に向かう

途中で、突然光大が部屋から顔を出す。

咲也を見つめる光大。

咲也「その察知能力なんかもっと別のことに使えない？」

光大「ファイナルファイトやらない？」

○同・光大の部屋（夜）

物が散乱して足元を埋め尽くしている室内。

咲也と光大がスーパーファミコンで
ゲーム『ファイナルファイト』をやっ
ている。

光大「兄の情報は役に立ったでござるか？」
咲也「ああ、ありがとね。まあまあ役に立つ
たわ」

沈黙。

咲也「いや、ごめん、正直あんまり訴訟的な
意味では役に立たなかったんだけど、なん
で急にそんなことしてくれたの？」

光大「……」

咲也「なんか今、急に思ったけど、え？
兄貴じゃないでしょ？ あの、なんだっけ、
ユナイテッドステイツオブパイオツみたい
なツイッターアカウント」

沈黙。

光大「あのイジメ動画のイジメっ子、何度
細かく見直してもお前に見える」

咲也「はあ？」

光大「違うよな？」

咲也「違うよ」

光大「なら俺も違う」

咲也「ならってなにさ」

沈黙。

光大「冗談だピョン！」

咲也「あれ、全然意味わかんない、あれ、

どうした？ 夢？ これ夢見てんの？

何この会話」

光大「余計なことは考えないことでゴワス。

お前疲れてるんでゴワスよく。大人社会

の理不尽に背伸びして正面から立ち向か

って、おかしくなってるんでGes！」

困惑の表情で光大を見る咲也。

光大はゲームを続けている。

咲也、呆然として、独り言のように、

咲也「……夢は小僧の疲れだもんな」

それから、二人がゲームをする音

だけが部屋に響く。

(了)

